

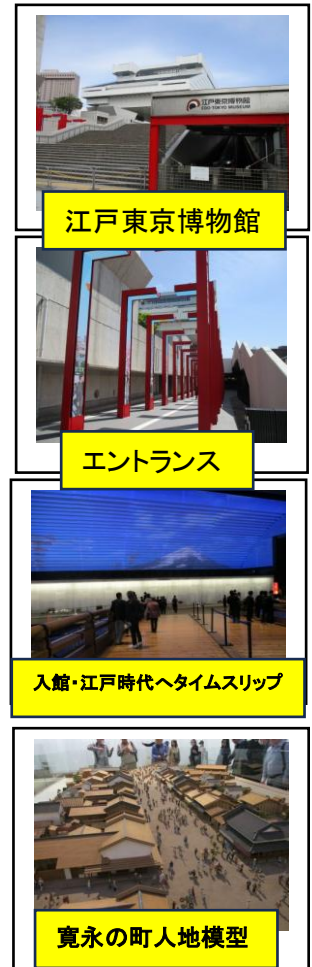
環境学習 2026 年5月 E24 【江戸東京博物館見学会】v2

会員 K.T.

江戸東京博物館へ向かう途中で、Kさん・Yさん・Aさん・Nさん、本日の見学会メンバーと次々に合流した。「鳥居」を模したアプローチ・エントランスを通り、1F チケット売場へいく。「当日券は、こちらのラインへお並びください。」と係の人、「随分と並んでいるなあ。」、という、「今日は少ない方ですよ。」、といわれた。4年閉館のリニューアルオープンで人気がある。常設展観覧料65歳以上は、400円、一般の半額になっている。メンバー各々年齢証明を提示し、チケットを購入、奥のエスカレーターで6Fの入口へ向かう。チケットのQRコードを6Fゲートにかざし入館、目の前に実物大といわれる日本橋がある。この橋をわたると、江戸時代ゾーンへタイムスリップする。「ここからの約3時間弱は、各々興味のある展示をじっくり見る自由見学、13:15分頃に1Fのレストラン前で待ち合わせしましょう。」、とした。橋の向こうに富士山とカーテン間仕切りが見える。橋の中央から下を見ると、左側は江戸の風景、右側は東京の風景が見える。観客がまばらに歩いている。橋を渡ると、係の人が、「カーテンをくぐってください。展示エリアになります。」「フラッシュはたかないでください」、という。各々カーテン間仕切りをくぐり、「江戸ゾーン」に入った。大勢の人が「寛永の町人地」、「大名屋敷」、「江戸城御殿」を縮尺模型で復元した展示ケースのまわりに群がっていた。外国の人が多い。スマホを耳に当てている。利用案内に「QRコードをお持ちのスマートフォン等で読み取り、音声ガイドを聴くことができます。」、と書いている。『それか』、と思った。江戸東京博物館は、「江戸東京の歴史・文化を振り返り、未来の都市と生活を考える。」、をコンセプトにしている。多国籍言語対応の音声ガイドは親切なサービスだ。寛永年間(1624~1644)の展示模型の写真をとっているうちに、メンバーと、はぐれた。

歴史文献によると、諸説あるも、江戸という名称は、地形的に「入り江の門戸」にあっていた、という説がある。徳川家康は慶長8年(1603)、征夷大将軍に就任、天下人となり、政権の拠点都市として江戸の建設を進めた。江戸城を中心に、周辺に大名・旗本・御家人とその家臣や家族が住居する武家屋敷を設け、町人の住居地と寺社地を配した。これらの城下町は、全国の名を動員した「天下普請」によって建設された。模型の街並みの寛永年間には3代将軍家光の時代になる。この時代は徳川幕府の体制が固まり、武家政権が盤石になっていく。模型郡の右手には、甲冑が入った展示ケースが並べられている。甲冑には細かな細工があり、綺麗な美術品といえる。模型郡の後の壁際展示ケースには、徳川家康の像と歴代の徳川将軍達の肖像画と16代の肖像画が展示されていた。『あれ、徳川将軍は、15代目の慶喜で最後だったはずだが、16代とは、何故?』、と思った。ネットで調べると、「幻の16代様、徳川家達(いえさと)、14代将軍の徳川家茂の子で、家茂が死んだときに、3歳だったため、慶喜が15代将軍になった。慶喜が大政奉還をしたので、徳川将軍としては慶喜で終る。」、とある。『なるほど、徳川家は滅亡したわけではないので、徳川宗家としての16代目は、ありか。』、と納得した。つらつらと6Fの展示品を見ていくと、6FのE1「江戸城と町割り」のエリアだけで、1時間が過ぎていた。今回の見学会の目的は、江戸・明治・大正・昭和の時代を俯瞰し、歴史と文化を視覚的に学習しよう、としている。『少し端折らないと、3時間では見切れないかもしれない』、と思う。次の5Fの江戸ゾーン展示エリアへエスカレーターで降りていった。パンフレットをみると、E2、E3、E4、E5、E6、E7、E8、E9、E10までである。展示エリアを、公益法人東京都歴史文化財団 編集『江戸東京博物館 常設展示 総合図書』2016年(平成28)11月を参照し、見学する。

E2「町の暮らし」のエリア、このエリアにも盛りだくさんの展示品がある。江戸時代の庶民の多くは、時代劇映画や落語でお馴染の長屋と呼ばれる住居に住んでいた。長屋とは、一つの棟を数戸に区切った住居で、棟の前後部屋を分ける形のものを棟割長屋といった。E2エリアには、実物大の「棟割長屋」の模型、井戸・稲荷・トイレ・ごみ箱が展示されている。復元年代は江戸時代後期(1780年代~1867)、屋根は柿葺、仕切りの壁は薄く、建築資材はほぼ木と紙の木造建築だ。この造りでは冬は寒かったであろう、と思う。長屋のトイレは住居の外にある共同トイレで「汲み取り式」だった。臭いと通気を考慮し、ドアは下半分しかない「半戸」



江戸東京博物館

エントランス

入館・江戸時代へタイムスリップ

寛永の町人地模型

という形式が主流で、近くによれば、上から中が見えるという構造だ。江戸時代の共同トイレの糞尿は下肥として売買されていた。トイレ事情の江戸川柳がある。

「店中の尻で 大屋は堆肥で 餅をつき」

(下肥がお金になるため、家主にとって店子の糞尿は現金収入であった、という仕組みを皮肉った句。)

「朝の尻 行列しては 腹をたて」

(朝の忙しい時間 共同トイレ(尻)の行列とイライラを皮肉った句)

江戸時代には下水処理施設はないが、生活排水(雑排水)と糞尿(し尿)は、分けられていた。生活排水は長屋の側溝から最終的に川へ流れ込む。し尿は「汲み取り式」で、下肥として売却され、農家では作物の肥料として使われていた。し尿処理に関しては、循環型社会だった、といえるかもしれない。

江戸は埋立地が多く、地下水は塩分を含んでいたため、飲料水には適さず、江戸幕府は神田上水や玉川上水等の上水道を整備し、各井戸に供給していた。江戸時代の水道システムは、神田上水や玉川上水の水を地下の木樋で引き込み、底に桶を置いた「上水井戸」が主流で長屋の共有財産となっていた。

井戸の管理と利用は各町内の大家と住人が共同で管理し、共同用水として利用されていた。井戸のメンテナンスは、毎年7月7日の七夕の日に、「井戸浚い」をし、井戸の水を全てくみ出し、底にたまった泥やごみを取り除き、井戸の側面を綺麗にしていた。夏にはやる疫病対策から生まれた行事らしい。衛生面からみても、良くできた仕組みだ。井戸水の共同利用は、「井戸端会議」の由来といわれる。

E3「出版と情報」エリアに進む、ここは、2025年NHK大河ドラマ「べらぼう」の蔦屋重三郎の世界が広がっている。出版による情報伝達と文化の発展をテーマにした展示エリアだ。江戸時代は、寺子屋・出版文化・貸本屋が普及し、幕末期の成人男性の約50%~70%、女子で15%~40%の人が読み書きができたという。世界でもトップレベルの識字率だといわれている。教育の源となった藩校や寺小屋は日本が誇るべき教育システムだった、といえる。

E4「江戸の商業」のエリア、江戸時代(1603~1867)は商品貨幣経済が発展した。幕府は貨幣流通の統制権を握り、金・銀・銭の貨幣を設け、各々に独立した「両」・「匁」・「文」という単位を設けた。江戸は政治都市であり、大消費都市でもあった。大阪・京都等の先進地から物資が送られ、多種多様な商人が活躍した。

E5「江戸と結ぶ村と島」のエリア、大消費都市となった江戸には、上方からの物資、近郊の農村や伊豆諸島でとれた商品作物が流入した。江戸時代は、村から年貢を取り立てることを財政の基盤としていた。やがて、年貢の一部が金納で認められるようになり、余剰作物を江戸向けの商品作物としてつくるようになった。貨幣経済の広がりには、また貧富の差を大きく広げることもあった。

E6「江戸の四季と盛り場」のエリア、江戸時代は安定した平和が続き、人口増加と産業が発展した。庶民が主役となって、四季折々の風景を楽しむ文化が広がった時代になる。季節毎の行楽名所が残っている。春:上野の花、根岸の鶯、夏:隅田川の川開き、河川や海辺での船遊び、御茶の水のホタル、秋:武蔵野の月見、品川の紅葉、冬は日暮里の雪見などがあった。自然環境については、誠に綺麗な時代だった、といえる。盛り場では、上野の山下、浅草寺の奥山、両国広小路などが有名で、見世物小屋・芝居小屋・水茶屋・路上には物売り・大道芸人で賑わった、という。

E7「文化都市江戸」のエリア、江戸には全国から人々が集まり、各地のいろいろな情報が集まった。文化サロンが生まれ、自由な交流によって、多様な文化が生み出された。

E8「江戸の美」のエリア、江戸が都市として発展するにつれて、江戸好みといわれる「粋」なデザイン装飾や江戸時代の風俗・美人・役者・風景を描いた浮世絵、10色以上の多色多版画の錦絵が発展した。

E9「芝居と遊里」のエリア、江戸での歌舞伎・芝居見物は庶民の娯楽として発展した。ここには江戸時代の代表的な歌舞伎の芝居小屋であった中村座の正面部分が実物大に復元して展示されている。遊里として有名な吉原は、幕府公認の遊郭として江戸が都市として成立するとともに起こり、約3~6千人の遊女がいたといわれる。遊女の華やかな身なりは、流行の先駆けとなり、その姿は浮世絵の好画材となっていた。華やかな光の一方には影がある。吉原の光と影のさわりは、2025年NHK大河ドラマ「べらぼう」にでている。



E10「江戸から東京へ」のエリア、嘉永6年(1853)、アメリカ東インド艦隊司令官ペリーが率いる黒船来航から15年後、慶応4年/明治元年(1868)、江戸幕府は倒壊した。江戸は、幕府陸軍総裁の勝海舟と東征軍参謀の西郷隆盛の会見により、奇蹟的な無血開城が決定、江戸は戦火で焼失することを免れた。時代は江戸から明治に改まり、新政府が成立した。江戸ゾーンから、次の東京ゾーンへ平行移動する。

途中でYさんとAさんに会う。各々展示物を堪能しているようだ。ここまでで、約2時間強が経過し、残り1時間ほどになった。少々、足腰が痛くなってきたので、5分ほど一人座って休憩した。ここから東京ゾーンに入る。私は明治という響きから、司馬遼太郎 著『坂の上の雲』を思い出す。冒頭に、「まことに小さな国が、開化期をむかえようとしている。」、明治後半の日露戦争を題材にした氏の小説であるが、明治という時代の気風を表している。明治時代とは、誠に不思議な時代だと思う。260年ほどに渡る江戸幕藩体制を壊して、明治維新の改革により、新たな近代国家がスタートした。頭にちょんまげをのせ、刀を帯び、士農工商の身分制度と封建制度に縛られていた日本人が急速に近代化した時代だ。この時代、欧米列強はアジアで帝国主義の侵略規模を広げ、次々にアジア諸国を植民地にした。日本は奇蹟的ともいえる国の独立を維持した。

司馬遼太郎は文中で次のように述べている。「(前略)明治初年の日本ほど小さな国はなかったであろう。産業といえば農業しかなく、人材といえば3百年の読書階級であった旧士族しかいなかった。この小さな世界の片田舎のような国が、はじめてヨーロッパ文明と血みどろの対決をしたのが、日露戦争である。その対決に、かろうじて勝った。その勝った収穫を後世の日本人は食い散らかしたことになるが、とにかくこの当時の日本人たちは精一杯の知恵と勇気と、そして幸運をすかさずつかんで操作する外交能力のかぎりをつくしてそこまで漕ぎ付けた。今からおもえば、ひやりとするほどの奇蹟といっている。(後略)」

「東京ゾーン」T1~T10は、明治・大正・昭和の近代日本、日露戦争・日中戦争・太平洋戦争、そして敗戦で焦土となり、焦土から復興した時代を展示している。

T1「文明開化東京」のエリア、明治期は政府主導で積極的に西洋の知識や技術が導入された。鉄道・郵便・電信電話・衣服・住宅・文学や演劇など多方面に欧米文化が取り入れられた。政府は、明治4年(1871)断髪令(散髪脱刀令)を発令し、ちょんまげを廃止、西洋風の「散切り頭」を推奨、帯刀は認めず。風刺歌に、「散切り頭を叩いてみれば、文明開化の音がする。」、と歌われた。明治5年(1872)、銀座から築地一帯を焼き尽くす大火が起こった。政府はこの復興で、新橋・築地・銀座地区の道路を拡張し、不燃建材の煉瓦をつかった建物を建設し、近代国家にふさわしい街づくりを目指した。銀座煉瓦街の縮尺模型が展示されている。また、現在の日比谷の一角に建設された鹿鳴館とその敷地が床下に縮尺模型で展示されている。政府は、欧米並みの街づくりや社交場をつくり、西洋の人々との親交を図り、幕末に締結された不平等条約の改正を目指し、欧米に追い付くことに、懸命になっていた時代だ。

T2「開化の背景」のエリア、明治時代の政府は、「富国強兵」・「殖産興業」を目標に掲げ、教育の改革と普及に尽力した。旧来の藩校や寺子屋の教育制度は統合された近代教育制度に変わっていった。明治5年(1872)欧米の教育制度を模範にした「学制」が府県に頒布され、内容も旧来の国学・儒教から西洋の近代科学に基づく実証的な教育に変えられた。その後、明治12年(1879)「学制」に代わって、地方の自主性にまかせた「教育令」が制定、明治23年(1890)には、「教育勅語」を発令、国家主義的教育が強まっていった。

T3「産業革命と東京」のエリア、明治時代は政府の「富国強兵」・「殖産興業」政策により、産業が発展した。明治中期、明治20年(1887)から後期の明治45年(1912)にかけて、重工業が急速に発展した。

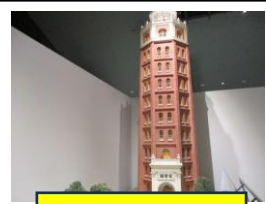
T4「市民文化と娯楽」のエリア、明治の世になっても、浅草の浅草寺境内裏の「奥山」は見世物小屋や大道芸で賑わっていた。明治6年(1873)、浅草寺境内一帯が公園地に指定され、明治17年(1884)奥山の見世物小屋は六区に移転させられた。「六区」では、従来の見世物小屋や大道芸に加えて、サーカス等が興行され、遊覧施設なども作られた。明治23年(1890)には、六区の北側に12階煉瓦造りの「凌雲閣」が建設され、賑わいをみせた。「凌雲閣」は1階から10階までが煉瓦造り、11階・12階が木造の展望塔、イギリス人の



東京銀座煉瓦街



鹿鳴館



浅草・凌雲閣

技師ウィリアム・バルトンが設計した。高い建物がなかった時代、地上60mの「凌雲閣」は東京の新名所となった。明治36年(1903)に日本初の活動写真の常設館「電気館」が開場すると、六区は民衆娯楽の本場となった。この賑わいは関東大震災まで続いた。

T5「関東大震災」のエリア、大正12年(1923)9月1日11時58分、マグネチュード7.9の関東大震災が起きた。地震は小田原・横浜・東京に大きな被害をもたらした。東京や横浜の都市部は地震後に発生した火災の被害が大きく、木造家屋が密集する下町地域を中心に延焼、東京府内で約6万6千人の人が焼死した。浅草の「凌雲閣」は、この地震で8階部分から上が倒壊し、その後、解体された。「銀座煉瓦街」は内部や屋根が焼け、壁だけの瓦礫となった。



T6「モダン東京」のエリア、大正時代(1912~1926)は、大正ロマンといわれる日本伝統文化と西洋文化が融合したモダン文化が起こった。流行のファッションで街を歩くモボ(モダンボーイ)・モガ(モダンガール)が街にいろどりをそえた。昭和時代に入ると、戦争の足音が聞こえてくる。昭和6年(1931)満州事変、昭和12年(1937)日中戦争勃発、そして、昭和16年(1941)太平洋戦争勃発、と昭和前期、日本は戦争の時代に入ってしまった。

T7「空襲と都民」のエリア、昭和19年(1944)サイパン島が陥落し、アメリカ軍による日本本土への空襲が始まった。昭和20年(1945)には昼夜に渡り、空爆され、市街地の5割強が焼失、東京は焦土となった。

T8「よみがえる東京」のエリア、昭和20年(1945)8月15日正午、天皇陛下の玉音放送で、国民は日本の敗戦を知った。戦争は終わったが、極度の食糧難と生活物資の不足に、多くの国民は苦しんだ。

T9「高度経済成長期の東京」のエリア、敗戦の焦土から、やがて製造業が復興し、昭和30年(1955)頃からは、高度成長期に入った。政府は住宅不足解消策に日本住宅公団を設立し、団地が次々と造成された。このエリアには団地の部屋が実物大で展示されている。年配のご婦人が、「そうそう、こんな間取り、私住んでいたの」、との会話が聞こえた。昭和39年(1964)、第18回オリンピック東京大会が開催された。「もはや戦後ではない。」、日本は戦後復興が終了し、近代化・技術革新の時代へシフトしたことを宣言した。

T10「現代の東京」のエリア、ここは、高齢者達には体験してきた生活用品の時代変化が展示されている。また、近代日本の高度経済成長期の負の部分も見ることができる。

昭和30年(1955)から不法投棄が社会問題となってきた。河川は急速に汚染されていった。当時は環境に関する関心が薄く、河川への不法投棄は絶えなかった。水質や大気汚染・騒音・ごみ等の都市公害に対し、生活環境を守るための住民運動が発生した。昭和40年(1970)代は江東区と杉並区の間でゴミの受け入れ拒否の東京ゴミ戦争が起きた。人口の急増、ゴミの急増、河川汚染は大きな社会問題になっていた。かつては、「春のうららの 隅田川のぼりくだりの 船人が♪」、と歌われた隅田川の昭和36年(1961)の状況は、メタンガスの泡が音を立てて浮かび上がっており、「川というよりドブのようだ。」といわれた。このため伝統行事となっていた両国の花火大会や早慶レガッタは昭和36年に中止となった。

水質汚濁の主な原因は、隅田川沿岸と上流の新河岸川沿岸にある工場の排水と石神井川や神田川の支流河川から流入する家庭排水によるものだった。隅田川の汚濁は公害問題としてとりあげられ、「水質保全法」・「工場排水の規制に関する法律」・「利根川からの隅田川浄化用水の導入」・「汚泥の浚渫」・「下水道の普及」等の施策がとられた。東京の環境改善の最大の推進力となったのが、昭和34年(1959)にオリンピック東京大会が昭和39年(1964)に開催することが決定したことだった。世界の注目を集めるオリンピック開催都市として、その名に恥じない環境と施設を整備することが厳命された。当時、「死の川」と化していた隅田川の浄化対策が強力に進められた。やがて、山の手線内側では、ほぼ下水道が普及、東京23区では5つの下水処理場で汚水の処理が行われるようになった。このような取り組みで、隅田川の浄化が進み、昭和53年(1978)には、両国の花火大会と早慶レガッタの伝統行事が復活した。などなどと、展示をみながら歴史と文化の変遷を考えていた。ふとみると、少し前に、車の展示を見ていたYさんが、傍にいます。「そろそろ集合時間になりますよ。」、という。『ここは面白い、歴史と文化を視覚的に学習できる。』、と思う。「江戸東京博物館」見学を終了し、予定の1F待ち合わせ場所に向かった。

